



Kaoru  
nishiya

# トキのために ーよりよい環境へー

西屋 馨

聞き手・鹿肝麻美 長尾彩嘉 宮谷彩花（石川県立羽咋高等学校1年）

## 人の世話が好き

名前は西屋馨です。昭和27年8月10日生まれ、61歳。家族は母親と妻と、子供3人。羽咋工業高校建築課を卒業後、建築大工の職人となり、昭和63年から不動産屋をやっています。前は金沢市内で不動産屋をやっていたけど、バブルが終わって景気がちょっと悪くなってきたもんで、これからどうしようかなと考えたんです。そしたら、一旦地元の羽咋で情報集めや地盤固めしてから羽咋を含む能登周辺も営業活動の範囲に入れればいいんじゃないかと思って、地元に戻ってきました。

その当時、自分の集落の次場町を振り返った時、秋祭りの青年団が3人しかおらんかった。3人で祭りを回しとるもんやから、「お前ら大変やな」って言うたら、「青年団が3人しかおらんから、来年からもう秋祭りなくなるかもしれない」って言い出した。僕らの時はものすごい盛んな祭りやったもんで、秋祭りを復活させたいなとふと思ったんです。不

動屋さんつつうたら人のお世話をする仕事なんですよ。その延長で、「じゃあ青年団をバックアップする壮年団作ってやる」って伝えて、1年半ほどかけて町内に関係する若者40人くらい集め、僕が団長の壮年団を作った。改めてこういう人の世話をするのが好きやったんやということを実感したな。

## 始まり

次場の村の祭りがそこそこ波に乗ってきたもんで、壮年団団長は次の人に譲りました。その後、本業の建築不動産業界で、事務連絡にインターネットが導入されるとの連絡が入り、自分でパソコンを習い始めたんや。そこにたまたま日本中国朱鷺保護協会って言うNPO法人を作った親戚の村本義雄が来て、「お前パソコンしとらんか？ パソコンできるんなら事務局やってくれ」って話してきた。これがきっかけで始めたんや。

## 朱鷺保護協会

会員は今、名簿上 150 人くらいやね。その中の 100 人くらいが石川県内の人や。県外の会員とはなかなか交流できんもんで、県内会員向けのスタッフ養成活動もやっていかないけん。

活動は希少な生き物ごとに変えてます。山のてっぺんから里山里海やから、山から海岸までの自然を使った遊びも交えながら調べたり、研究したりして楽しく学ぶという手法を使っとる。こういう活動の方がみなさんも楽しいやろうし。

## 初めて見たトキ

トキを初めて見たんは日本中国朱鷺保護協会に入った後やった。この会にはトキの観察のために中国に行くツアーがあるんです。野山に生息し水辺で餌をついばむトキを見たいと思って、そのツアーで中国に行って、トキを見ました。初めてトキを見たときは「なんと綺麗な鳥がおるもんや。日本でも中国でもなんで絶滅したんやろ」と思ったな。

## トキ

大きさは嘴から羽の後ろまでだいたい 70cm ~ 75cm で、餌の食べ具合で大小がでてくる。カエルやドジョウとかを餌



羽の色を変えているトキ。  
白い羽が濃いグレーになる

にしとるね。

トキは繁殖期になると、自分で羽の色を変えるんです。毎年 1 月中旬になると、胸あたりから黒い汁をだして、嘴で上半身まで色を塗る。こういうことができる鳥っていうのはトキだけ。何でこんなことをしとるかって言うと、灰色の冬山で真っ白なトキが巣の中で卵を抱いていると上半身が目立って、天敵の標的になる。隠れん上半身をカモフラージュするために黒い汁を塗るんや。

かつてのトキは人なつっこい鳥だったらしい。やけど第二次世界大戦中や戦後、日本人は食べる物が少なかった。だから自分のお腹を満たすために野鳥とかを捕まえて食べたらしい。当然、鶏の 2 倍ほどの大きさのトキもターゲットになってしまったわけや。鉄砲で狙われ、追いかけることになったので、人間を見ると逃げる習性になってしまった。

NPO 法人日本中国朱鷺保護協会に入会して 12 年間、絶滅に至った情報を集め分析した結果、日本でも中国でも絶滅原因の多くは人間による乱獲でした。

## 害鳥

能登半島の農家にはトキを害鳥やと思っとる人が少ない。田植えした当初は苗が短いもんでトキとか田んぼに入ってくるわけ。田んぼはやわらかいやろ。やわらかい田んぼに足を入れるとズボズボッてはまっていってしまう。したら、多分経験から苗踏んだら沈まんなってことをトキらはわかって、苗を踏むようになってきた。それを見た農家の人はトキを害鳥と呼ぶようになった。「害鳥や」「苗植えたら害鳥に踏まれてしまう」って、そういうイメージがなかなかとれんね。

## トキの住む環境作り

調べていくとトキという生き物の環境が良くない。まず餌が足りない。これまで富山県黒部市にいた「佐渡の放鳥トキ」が平成 25 年 5 月 27 日に羽咋に飛来して、100 日以上も羽咋市の邑知平野で採餌行動をしている。そのトキを観察すると、田んぼに嘴を差し込んでも、餌をキャッチして飲み込む仕草の回数は少なく、餌となる生き物が少ないことをうかがい知ることができる。今、トキはそんなにおらんから広い邑知平野のどこ行っても食べる餌はあるやろう。けど、今まで通りの農薬を使う農業をやっとったら、たぶんトキの餌は足らんくなってくる。だから農家の人らに無農薬栽培を心がけようという気持ちになってもらうことは必要。

僕は無農薬の米作りをしていかなきゃいけないって思うげんけど、そのことを一般の農家の人に言ったら「お前田んぼも知らんとって何がわかっとなるげんて」って言われた。



それで自らが実践してやっていかんといかんと思って、耕作放棄地を借りて無農薬米作りを実践しとる。そこでは、トキの餌となる野生生物などが自然と増えてくる。

トキの餌が自然とわいて出てくる環境というものは、たぶん農業はそんな濃くない。トキが安全に生息できる環境では農業の入ったらん米を食べることができるんやから、人間にとっても安全な環境じゃないかって思っとる。人間にも安全な環境を守るために、農業は人間にも決して安全なものではないことを伝える活動を継続していきたいと思います。

### これからの目標

ゆくゆくはトキの生態環境を良くしていきたい。それと、トキという生き物や、だんだん数が減ってきている生き物を題材にさしてもらって、環境教育もしていければいいなと思ってる。

この地球の自然保全を考え、行動に移せるのは人間しかいないと思う。人間と多くの野生生物が安全に生活できる環境を守る活動は、一人の力では限界があるので、みなさまのご理解とご協力をお願いしたいですね。

[取材日：2013年8月6日・9月29日]

### PROFILE

**西屋 馨** にしや かおる

昭和27年8月10日・61歳・自営業（建設設計事務所 不動産業）

平成13年にNPO法人日本中国朱鷺保護協会から事務担当を探しているとの連絡が入り、ボランティアに興味があったため入会。かつてトキが生息していた羽咋市眉丈山にある羽咋市ちびっこセンターを活動拠点とし、無農薬田んぼ作りや田んぼの生き物探しなどの環境教育の他、さまざまな活動を継続中。

### ● 取材を終えての感想 ●

「聞き書き」をすることが決まった時、「聞き書き」というものがよく分からず、やり切ることができず不安でした。けれども、トキにとって少しでも住みやすい環境をつくろうと努力している名人の話をもとめているうちに、この「聞き書き」をちゃんとやりきりたいと思いました。名人の話をもとめるのは大変だったけれど、名人の言葉を文字に残すことができうれしかったです。

(鹿肝麻美 写真：左)

私はこの「聞き書き」に参加するまでトキのことをあまり知りませんでした。そんな私にとって名人の話はとても面白く、興味深いものでした。戸惑うことも多かったですが、自分の知らない世界を知ることができ、よかったです。

(長尾彩嘉 写真：中央)

一番大変だったことは、書き起こし作業です。普段耳にしていた方言もICレコーダーを通して聞くと、聞き取りにくかったりして、文章にまとめることが大変でした。今まで方言をあまり意識していなかったのだと実感しました。この体験を通して、環境保全の大切さ、地域で培われたものの尊さを知ることができたと思います。

(宮谷彩花 写真：右)

